

平成20年9月29日
気象庁地震火山部

最近の東海地域とその周辺の地震・地殻活動

現在のところ、東海地震に直ちに結びつくような変化は観測されていません。

1. 地震活動の状況

全般的には顕著な地震活動はありません。

引き続き、静岡県中西部のフィリピン海プレート内ではマグニチュード3.5以上の地震の発生頻度は少なく、愛知県地殻内では地震活動がやや活発な状態になっています。その他の地域では概ね平常レベルです。

なお、長野県南部から愛知県にかけてのプレート境界付近で8月25日頃～9月4日及び9月7日～8日にかけて深部低周波地震が観測されました。

2. 地殻変動の状況

全般的には注目すべき特別な変化は観測されていません。

GPS観測及び水準測量の結果では、御前崎の長期的な沈降傾向はこれまでと同様に継続しています。

なお、長野県南部から愛知県にかけてのプレート境界付近における「短期的ゆっくり滑り」に起因すると見られる地殻変動が8月25日頃～9月4日にかけて周辺の歪計等で観測されました。この付近では同様の現象が本年1月にも観測されています。

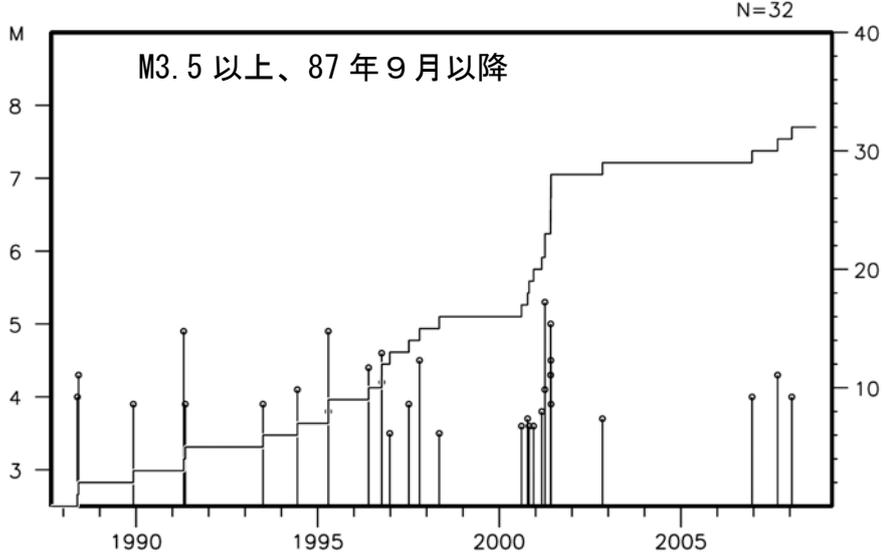
添付の説明資料は、気象庁及び国土地理院の資料から作成。

気象庁資料の作成に当たっては、気象庁のほか防災科学技術研究所、東京大学、名古屋大学等のデータを使用。

東海地域の地震活動の状況

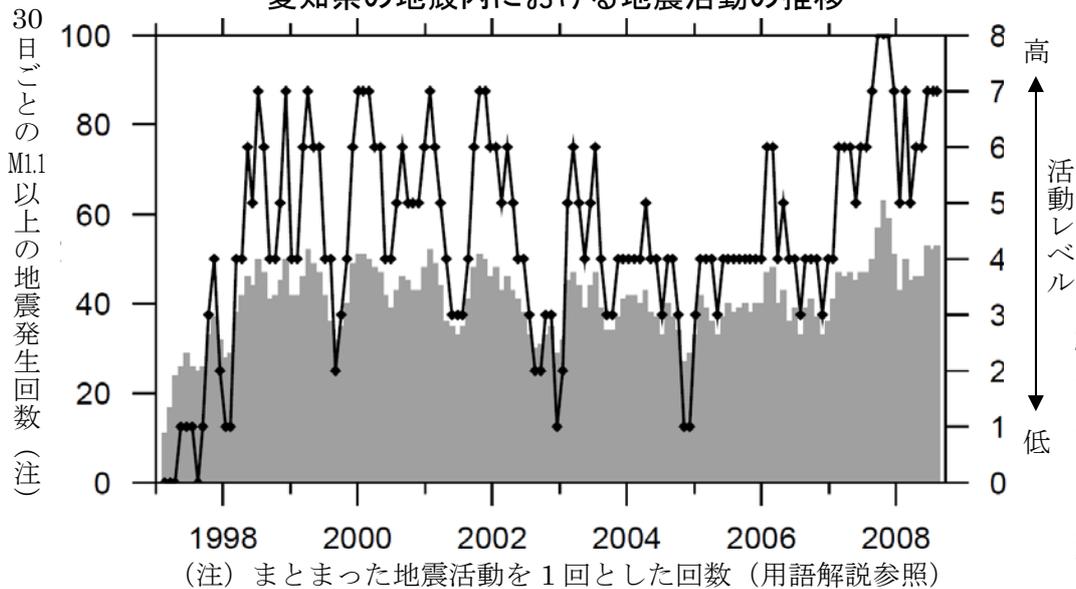
静岡県中西部のフィリピン海プレート内でマグニチュード3.5以上の地震は少ない。
愛知県地殻内でやや活発な活動。

静岡県中西部のフィリピン海プレート内の地震回数積算図・地震活動経過図



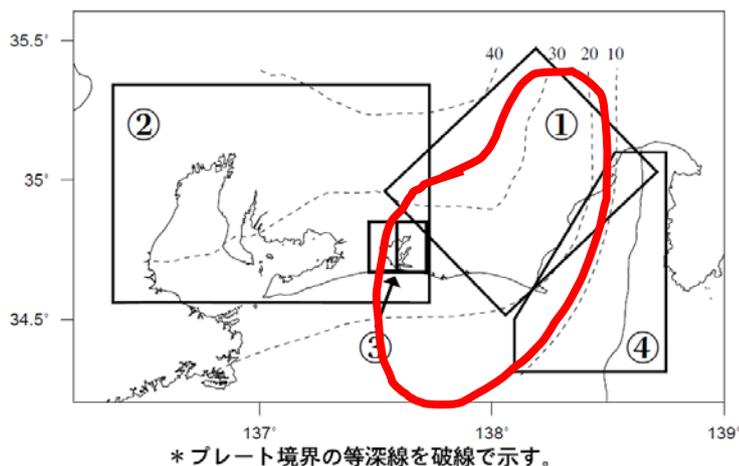
2001 年後半ごろから M3.5 以上の地震発生回数が少ない。

愛知県の地殻内における地震活動の推移



2007 年半ば頃からやや地震発生回数が多い。一旦落ち着いていたが、2008 年半ば頃から再び活発になっている。

(注) まとまった地震活動を1回とした回数 (用語解説参照)



- ① 静岡県中西部
- ② 愛知県
- ③ 浜名湖
- ④ 駿河湾
- 赤：想定震源域

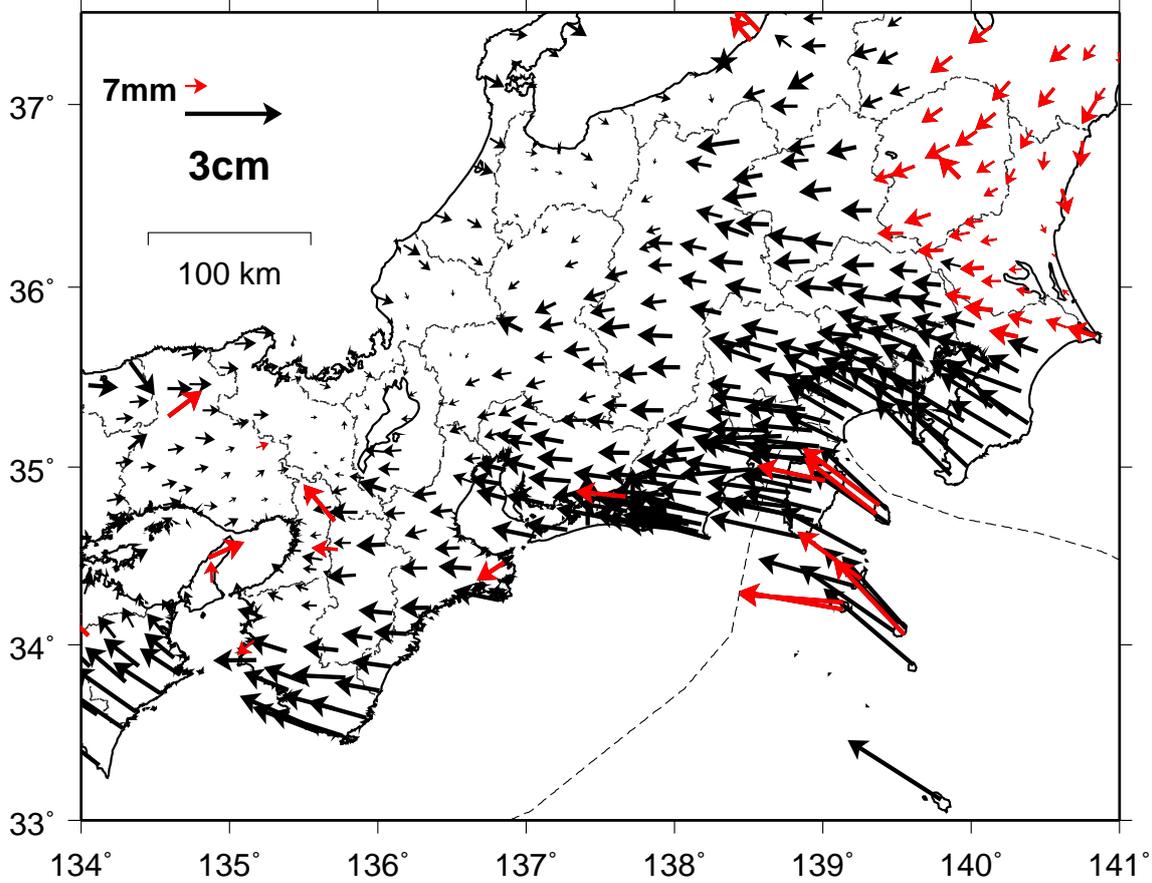
気象庁作成

東海地方の最近の地殻変動（水平変動）【大湊固定】

（ 2007年9月～2008年9月）

基準期間：2007/8/28 - 2007/9/6 [F2：最終解]

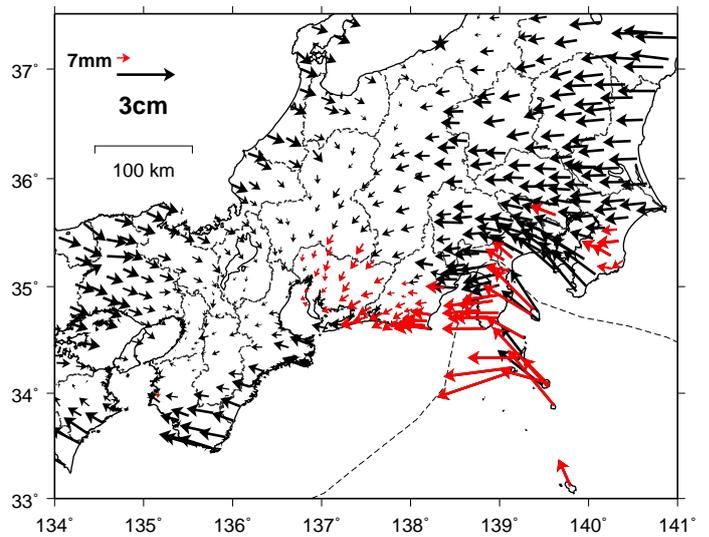
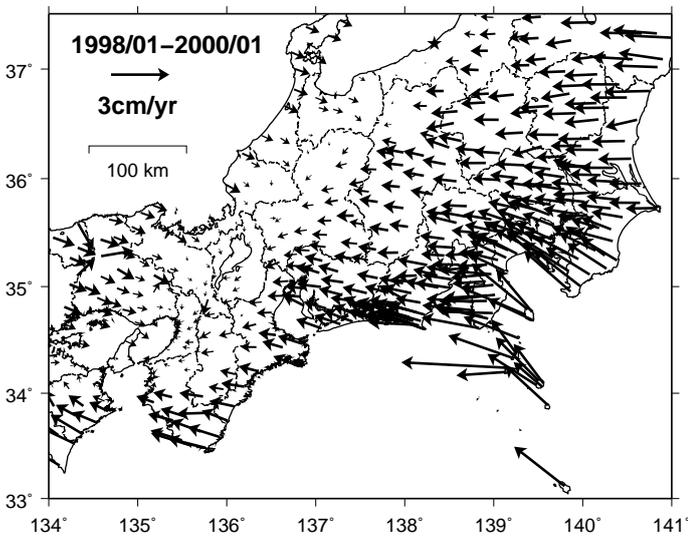
比較期間：2008/8/28 - 2008/9/6 [F2：最終解]



・スロースリップ開始前の変動速度ベクトル（左下図）との差の絶対値が7 mm 以上の変動ベクトルを赤矢印で表示している。

スロースリップ開始以前の地殻変動速度
(1998年1月～2000年1月)

スロースリップ進行期の地殻変動速度
(2001年1月～2004年1月)

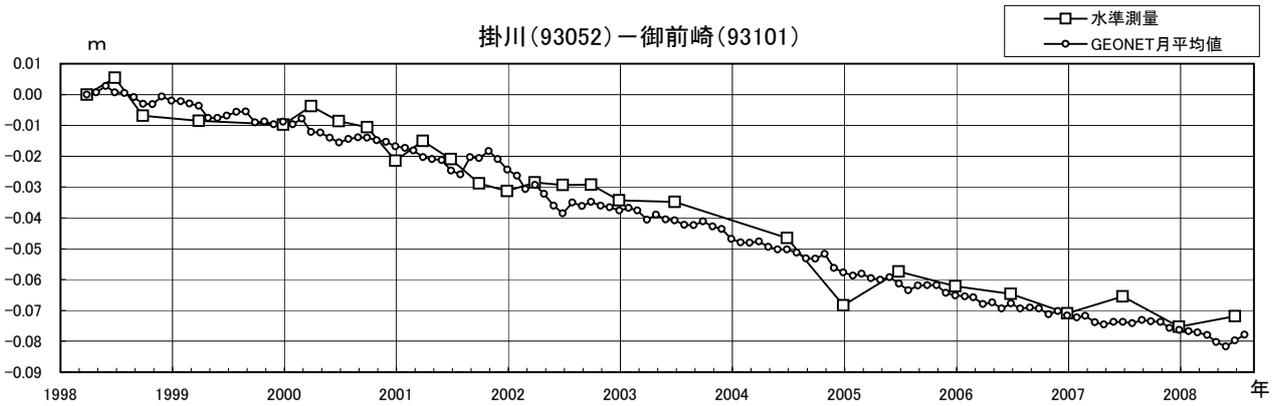


国土地理院資料

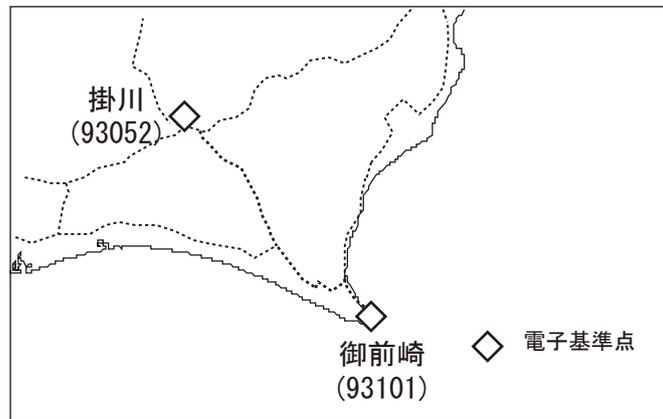
御前崎 電子基準点の上下変動

水準測量とGPS観測の比較

水準測量とGPS観測の結果は、よく一致している。
掛川に対して、御前崎が沈降する長期的な傾向が継続している。
水準測量に昨年夏季と同様にわずかな隆起が見られる。



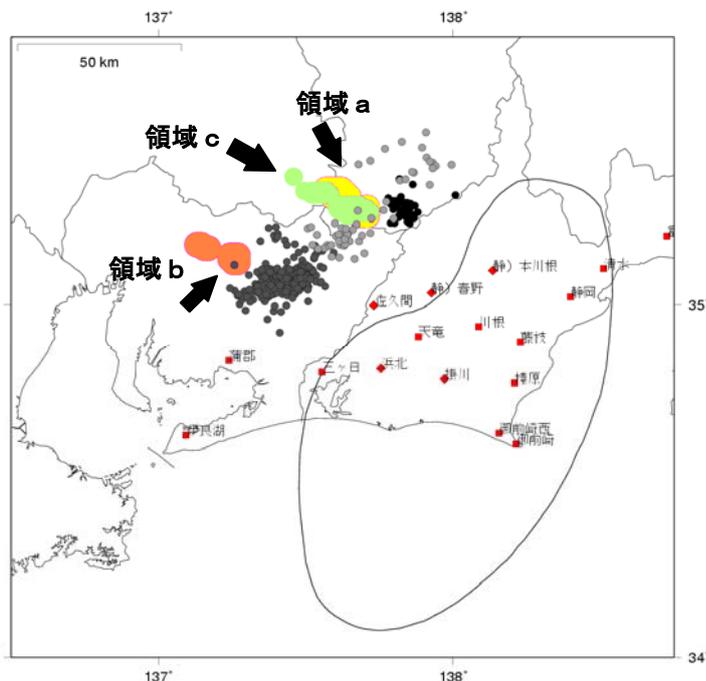
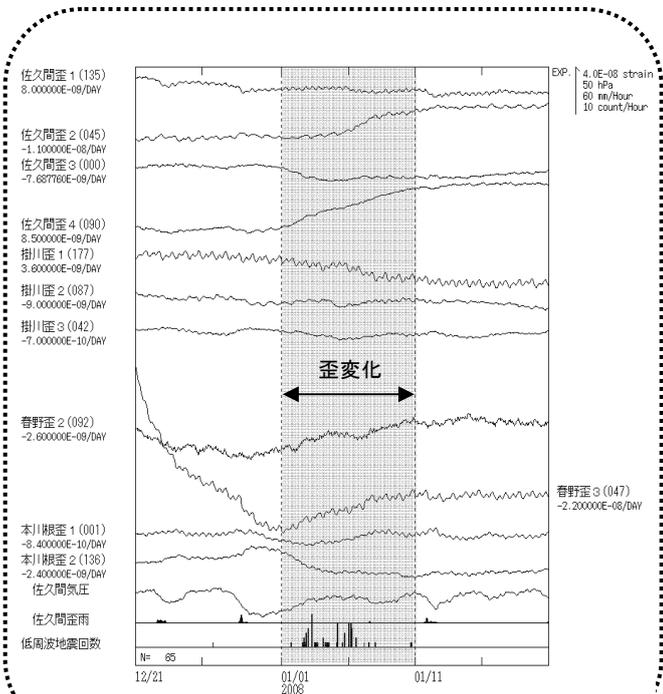
位置図



東海地域及びその周辺の地殻変動データの状況

2008. 08. 01~2008. 09. 21

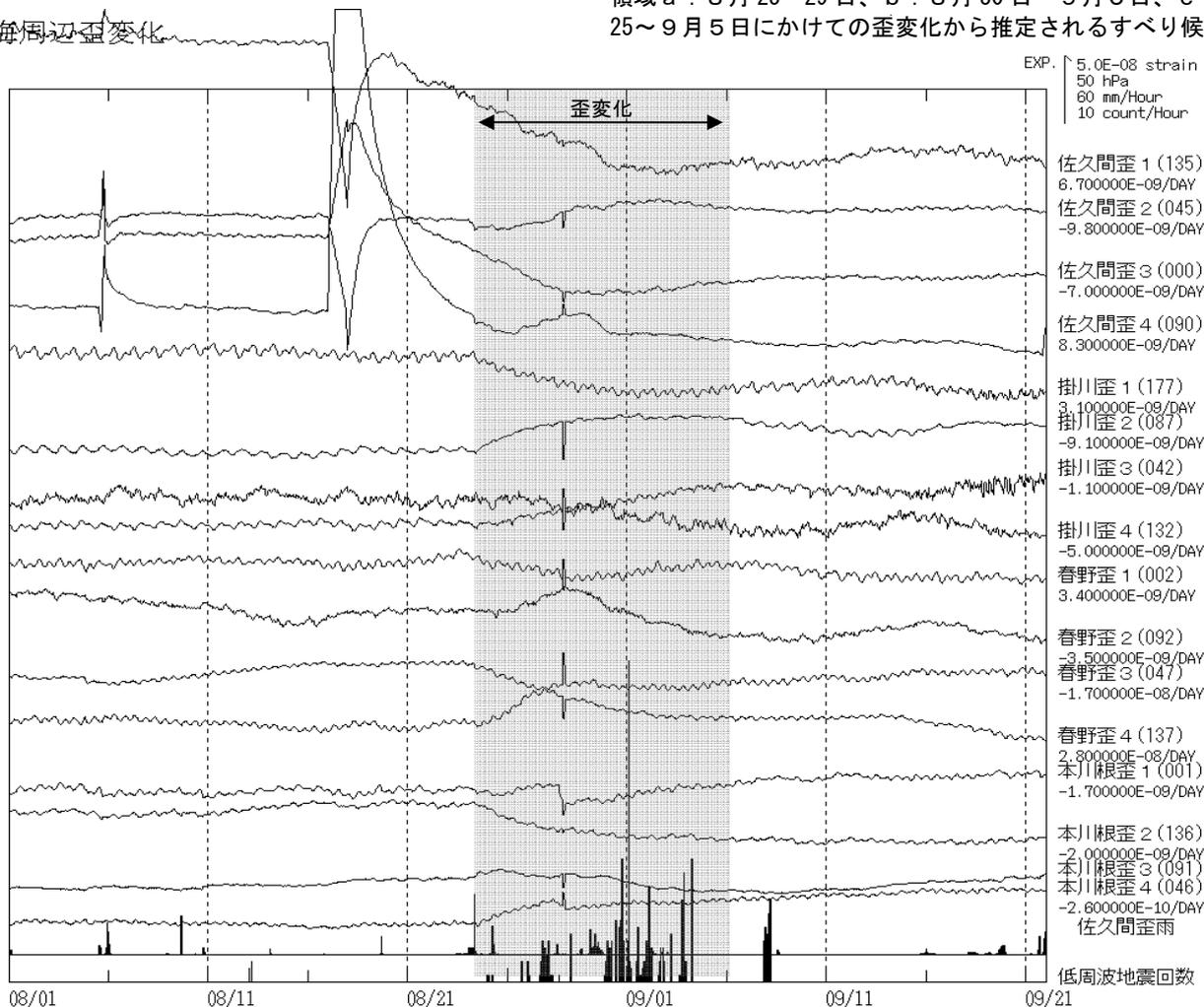
8月25日から9月8日の間、長野県南部から愛知県にかけて震源位置を変えつつ断続的に深部低周波地震活動が観測され、そのうち8月25~29日及び30~9月4日の活動で周辺の歪計で地殻変動が捉えられた。両期間毎の歪変化から推定された「短期的ゆっくり滑り」の候補領域は各々の深部低周波地震の活動領域付近で、規模はモーメントマグニチュード(Mw)換算でそれぞれ5.6~5.7及び5.7~5.8。また、両期間通しての歪変化から同様にすべり候補領域を求めたところ、その位置は前半期とほぼ同じで、規模は5.7~5.9という結果が得られた。その後9月7~8日にかけて発生した長野県南部の活動では、ノイズレベルを超えるような明瞭な歪変化は観測されていない。



- ◆歪観測点。
- 深部低周波地震震央(淡灰：8月25~29日、濃灰：30日~9月4日、黒：9月7~8日)
- 領域 a：8月25~29日、b：8月30日~9月5日、c：8月25~9月5日にかけての歪変化から推定されるすべり候補

※長野・愛知県境付近の「短期的ゆっくり滑り」に起因すると見られる地殻変動の最近の例(2008年1月1~10日)

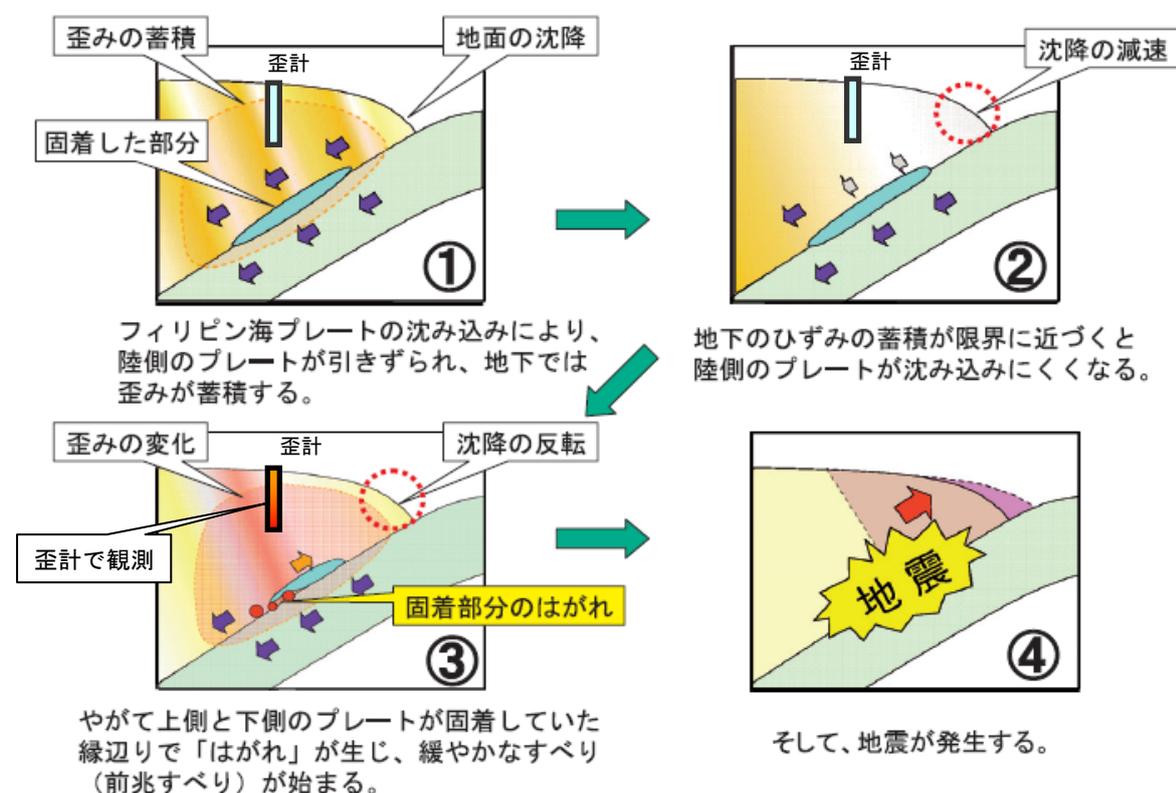
東海周辺歪変化



「東海地震の予知」及び用語解説

現在最も有力とされる前兆現象発現のメカニズムは、「前兆すべり（プレスリップ）」が発生するというものである。地震は地下の断層が急激にずれる現象であり、ずれた領域を震源域と呼ぶ。最近の研究により、震源域全体が急激にずれる前に、その一部が徐々にゆっくりとすべり始めると考えられるようになった。この前兆すべりと呼ばれる現象を、歪計による精密な地殻変動観測等で捉えようというのが、気象庁の短期直前予知の戦術である。

なお、想定震源域の一部で発生した前兆すべりによって地殻がどのように変形するかは理論的に計算することができる。よって、歪計などに異常な地殻変動データが観測された場合に、それが前兆すべりによるものかどうかは科学的に判断できる。



東海地震発生シナリオ

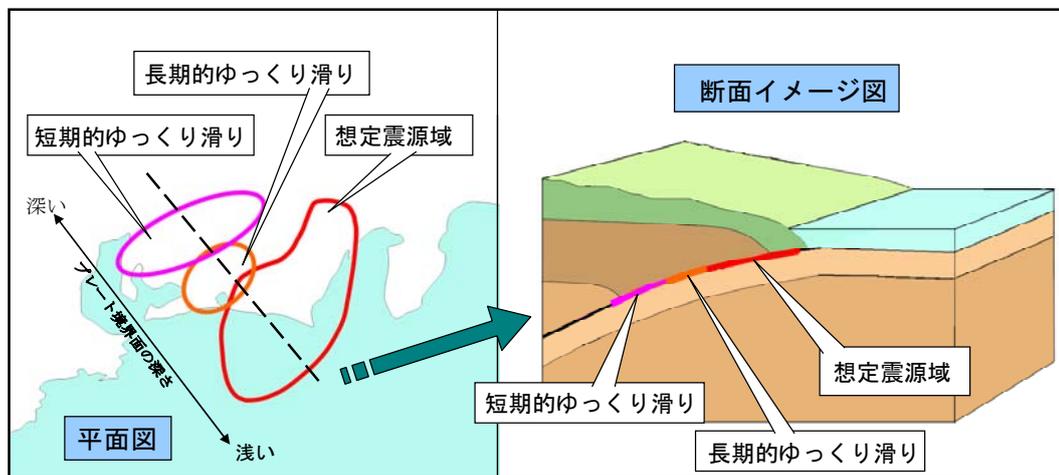
東海地震は、①歪の蓄積②沈降の減速③前兆すべりを経て④地震発生へと至ると考えられている（前兆すべりモデル）。

「長期的ゆっくり滑り」、「短期的ゆっくり滑り」、「深部低周波地震（微動）」

沈み込むフィリピン海プレートと陸のプレートとの境界の、東海地震の想定震源域より少し西側の領域において、GPS 等により 5 年程度継続しゆっくりと滑る現象が観測された。これは、「長期的ゆっくり滑り」又は「長期的スロースリップ」と呼ばれている現象である。この長期的ゆっくり滑りは、東海地震の想定震源域に隣り合っていることから、東海地震の前兆すべりにつながっていく可能性を持つ現象とも考えられている。

また、「長期的ゆっくり滑り」とは別に、これよりさらに西側や北側のプレート境界の、もう少し沈み込んだ領域で 2～10 日程度継続するゆっくりとした滑りがあると考えられており、これに起因すると見られる地殻変動は、東海地震予知のために設置された歪計によっても観測されることが多い。この現象は「短期的ゆっくり滑り」又は「短期的スロースリップ」と呼ばれている。この短期的ゆっくり滑りの発生時には、「深部低周波地震（微動）」と呼ばれる、深さ約 30～40km で発生する、通常より長周期の波が卓越する地震が通常観測される。

いずれの現象も沈み込むフィリピン海プレートと陸のプレートの境界で発生していると推定されている。



東海地震想定震源域、並びに長期的ゆっくり滑り及び短期的ゆっくり滑りの発生領域

「活動レベル」

M1.1 又は M1.4 以上の地震について、1990 年代頃の 3～10 年の一定期間における地震活動レベルを基準とし、最近 3 か月～半年の地震活動の静穏・活発な状態を統計的手法によって指数化したもの。指数は 0 から 8 の 9 段階。4 が平均的な状況、1 以下は比較的稀な静穏化を、7 以上は比較的稀な活発化をそれぞれ示唆する。

なお、地震は時間空間的に群(クラスター: cluster)をなして起きることが多くある(「本震とその後に起きる余震」、「群発地震」などが典型的なクラスター)ことから、地震活動の推移を見るためには、余震活動等の影響を取り除いてまとめた地震活動を 1 回の地震活動として評価している。(具体的には、相互の震央間の距離が 3 km 以内で、相互の発生時間差が 7 日以内の地震群をクラスターとして扱い、その中の最大の地震をクラスターに含まれる地震の代表とし、地震が 1 つ発生したと扱っている。)

詳しくは気象庁ホームページの以下のページをご参照下さい。

東海地震に関する基礎知識

<http://www.seisvol.kishou.go.jp/eq/hantekai/index.html>

「東海地震に関連する情報」Q&A

http://www.seisvol.kishou.go.jp/eq/hantekai/qa/index_qa.html